

罨師の助手

R18

2026年8月23日

目次

第1話

第2話

第1話

山深い猟場の夜だった。

透はいつものように単独で罾を見回っていた。

親方が昼間に言った。

「今日は大型がかかるかもしれん。気をつけろ」

獣道に仕掛けた罾を、月明かりの下で順に確認する仕事だ。透は20代前半の罾師の助手である。黒髪を短く刈り、山仕事で引き締まった体を黒い作業着が包んでいる。獲物を捕らえる側の仕事だ。縄を扱い、罾を仕掛け、かかったものを検分する。それが日常だった。

風が冷たい。木々がざわつく。足元の落ち葉は湿っている。透は懐中電灯の代わりに月を頼

りに歩いた。腰には職の縄とナイフ。いつもの装備だ。縄の感触を確かめるように、腰に手をやる。仕事の道具だ。

獣道の角を曲がったところで、透は足を止めた。

罠に、影がかかっていた。

大きい。

いつも捕まる中型の獣とは違う。影の輪郭が太い。肩の高さからして、人の倍はある。

「来たか」

透は用心して近づいた。確認のためだ。影の大きさから、イノシシか大型の鹿を想定した。罠の縄の張り具合を確かめる。獲物の状態を検分する準備をした。

影が動いた。

縄が翻る。自分が腰に下げていた職の縄が、自分の手首に巻き付いた。強く、熟練した手つきで締め上げられる。二重に絡められ、指が動かない。縄の感触が自分の仕事道具だとすぐに分かった。獲物を縛るためのものが、今は自分の手首を締めている。逆転だ。職の道具が、自分を捕らえる道具に変わった。

「あ……？」

体がねじ伏せられた。地面に背中を押しつけられる。冷たい土と、上から覆い被さる熱い体。体重が全体に乗る。逃げ場がない。大きな体が影のように覆い被さる。圧が胸と腹にかかり、息が浅くなる。毛並みが作業着を通してざらりと擦れる感触がある。体温が人とは違う熱さで、作業着の布を通して広がる。

「この罠は俺のものだ。お前も最高の獲物だ」

低い声が耳元に落ちた。黒い毛並みの大型の獣人だった。狼に近い顔。黄色い目。牙が長い。体格は人の倍はある。体温が人とは違う熱さで、作業着越しに伝わってくる。獣の匂いが濃い。鼻腔を満たす。息が首筋にかかるだけで熱い。毛並みが頬のすぐ近くにある。力の差が、圧の重さでわかる。

透は悪態をついた。

「仕事の邪魔をするな。離せ。親方に報告する」

獣人は動かない。大きな手が透の手首の縄を確認し、もう一方の手で体を押さえつける。力の差が明確だった。透の腕は動かない。腰も浮かない。足を蹴っても、太い腿で挟まれて動け

ない。全体に圧がかかり、体が沈む。逃げようとしても、圧が動かない。

「報告か。その前に検分する。獲物の検分だ」

手が作業着の裾から入る。熱い。人の手のひらではない熱さだ。腹を撫で上げ、胸に達する。乳首を指で摘ままれて、透の体が跳ねた。

「ん……っ」

（なんだ、これ。熱い。指が太い。仕事中に……こんな反応が）

「敏感だ。いい」

指が乳首を転がす。もう一方の手が背中を押さえ、逃げられないように固定する。透の呼吸が浅くなる。指の腹で強く、弱く、刺激が変わる。硬くなった乳首を摘まみ上げるように動

かされる。熱と圧が同時に来る。毛並みの一部が肌に触れる瞬間がある。

「あ……っ、やめろ……。触るな」

「まだ序の口だ」

作業着のボタンが外される。一粒ずつ。胸が露わになる。冷たい夜気と、熱い掌が交互に肌を刺激する。乳首を再び摘ままれ、声が漏れた。

「ひあっ……。！」

（なんで、声が出る。仕事中だ。仕事の邪魔だ。こんなの感じるわけない。親方に報告する）

恥ずかしい。動揺した。体が勝手に反応している。乳首が硬くなり、指の熱で疼く。もう一方の乳首も摘ままれ、同時に刺激される。腰

がわずかに動く。獣の匂いが胸元に濃く落ちてくる。息が乱れる。

手が下へ移動する。ズボンの紐を解き、下ろされる。腿を無理に開かされる。体格差で抵抗できない。大きな掌が腿の内側をゆっくり撫でる。熱い。毛並みの感触が肌に触れる瞬間がある。指が股間に達する。陰茎を軽く握り、根元から先へ撫でる。すでに硬くなっている。検分するように、状態を確かめる手つきだ。

「ここも硬くなってる」

「るっせえ……！ 触るな……っ。離せ！」

指がさらに下へ。入り口を指先でなぞる。円を描くように、熱を確認するように。何度もなぞられる。入口が反応して収縮する。獲物の状態を確かめるように、丁寧に、しかし容赦なく。

「ここか。お前は特別だ。最高の獲物だ」

「ひあっ……！　そこは……っ。やめろ」

体が跳ねる。恥ずかしい。感じたくない。なのに熱が腰に集まる。指が押し当てられ、入口がわずかに開く。

（仕事中に……こんな反応するなんて……っ。親方に報告する。報告しなきゃ。体が……）

指が浅く入る。内部の熱と柔らかさを確かめるように動く。一本だけ。ゆっくりと、検分するように出し入れされる。太い指の感触がはっきりわかる。内部の壁をゆっくり擦られる熱が広がる。圧が内部に広がる。獲物を検分する動作そのものだ。

「んあっ……！　あっ……や、め……」

「いい反応だ。締めつけてくる。印を付けて、俺のものにする」

獣人の顔が近づく。首筋に熱い息がかかる。息そのものが熱く、湿っている。獣の匂いが直接鼻に入り、濃くなる。牙が肌に当たる。尖った感触。毛並みが頬に触れる。黒い毛の感触がざらりと肌を掠める。体温が直接伝わる。力の予告のように、牙の先が皮膚に圧力をかけてくる。沈む手前の圧。肌がわずかに凹む。息がかかり続ける。匂いが、牙の近くでさらに濃くなる。

「印を付ける。逃げてでも分かるように」

痛みが走った。牙が首筋の皮膚を浅く、しかし確実に噛む。皮膚が沈む。圧が一点に集中する。力のコントロールがわかる。逃げられない深さで、しかし深く裂かない。血が滲む。所有

の印だ。熱が残る。鋭い痛みが走り、すぐに甘い熱に変わって首筋から肩へ落ちる。下半身まで熱が繋がる。指が同時に動く。浅く、しかし確実に内部を擦る。痛みと快感が混ざる。腰が勝手に浮く。体が跳ねる。内部が収縮する。毛並みが顔に触れ、匂いが血の匂いと混ざる。牙の力が、皮膚を通して伝わる。熱が、血の熱が、内部の熱と重なる。

透は歯を食いしばった。

「やめろ……っ、親方に—— 痛い……っ、あっ……ひあっ」

拒否の言葉が途切れる。痛みで碎ける。「親方に」が「痛い」に変わり、声が短音に変わる。体が跳ね、内部が締まる。喘ぎが、短く連続する。

「親方には言わなくていい。お前は俺のものだ」

次は腿の内側だ。柔らかい内側に牙が沈む。大きな手が腿を固定し、圧を加える。また鋭い痛みが走る。柔らかい内側だから熱が早く広がる。甘い疼きに変わる。力のコントロールがわかる。浅く、しかし逃げられない深さで印が二つ、体に刻まれる。血が腿を伝う。冷たい空気に触れて疼く。指が浅く動くたび、痛みの熱が下腹に繋がる。内部が勝手に締まる。体全体が圧と熱に包まれる。毛並みが腿の柔らかい内側に擦れる。匂いが血と混ざる。柔らかい肉だから、痛みが鋭く、熱が早く広がる。固定された腿が、動かない。圧が、印を確実にする。

（痛い。なのに……体が熱い。なんで……こんな。仕事の邪魔だ。報告しなきゃ。でも……

っ、熱が広がる。内部が……締めつけて。印が……疼く。体が、覚えている)

下半身が硬くなる。恥ずかしい。工作中に、こんな反応をするなんて。獣人の手がそこに触れた。勃起を確認するように、指が這う。掌全体で包むように確かめる。先を親指で擦る。先から汁が滲んでいる。印の疼きが、その刺激と混ざる。痛みの余波が、快感に変わる。

「反応している。獲物らしくていい。汁も出てる」

「るっせえ……！ 仕事の邪魔だ、離せ！
んっ……ひあっ……あっ」

悪態を吐く。芯は残っている。だが体は高温の体温に封じられ、力が入らない。喘ぎが漏れそうになる。指が浅く動くたび、内部が締め付けてしまう。乳首を摘まれたまま、股間を扱

われる。息が上がる。印の痛みが波のように快感に変わる。体が、勝手に反応する。

「あ……っ、触るな……そこは……ひあ
っ……んっ……あっ」

手が動く。検分は続く。体格差でねじ伏せられたまま、体温と力で囲まれる。透の呼吸が乱れる。乳首を再び摘まれ、同時に股間を撫でられ、指が奥へ少し押し込まれそうになる。痛みの印が疼く。毛並みが肌に擦れる。匂いが濃い。圧が全体を支配する。逃げ場がない。

「んっ……！　ひあっ……！　やめ……あ
っ……んあっ」

（こんなの、感じるわけない。仕事だ。仕事の邪魔だ。でも……熱い。体が……勝手に。印

が疼くたびに、熱が落ちる。報告しなきゃ……)

だが体は正直だった。熱が下腹に溜まる。獣人の大きな掌が股間を包むように確認する。指が先端を掠め、根元を締め、リズムを変える。喘ぎが段階を踏む。意味のある拒否から、途切れ、短音へ、無意味な漏れへ。体が跳ねる。恥ずかしい。否認したいのに、腰がわずかに動いてしまう。印の疼きが快感に混ざる。痛みが熱に変わり、熱が腰に落ちる。力の圧が、体温が、毛の感触が、匂いが、すべてを封じる。所有の証が、体に刻まれていく。首筋の印が疼き、腿の印が疼き、両方が熱の波を作る。

獣人は印を確認するように、首筋と腿の傷を指で撫でた。血が指に付く。指を舐めて確認する。黄色い目が透を見下ろす。獣の匂いが、自

分の血の匂いと混ざって鼻に残る。毛並みが揺れる。力の余韻が、体に残る。印の位置を、確かめるように撫でられる。熱が指から蘇る。

「逃げても分かる。この印で俺が追う。次も来る。次はもっと奥まで検分する。お前の中まで」

縄が緩められた。透は体を起こした。首筋と腿が熱い。印が残っている。血が少し乾き始めている。立場は、捕らえる側から捕らえられる側へ書き換えられた。作業着を直そうとする手が震える。印の疼きが、直す動作のたびに走る。熱が残る。血の乾いた感触が、肌に張り付く。首を動かすだけで、印が動く。腿を閉じると、内側の印が擦れる。

獣人は立ち上がり、森の奥へ消えた。足音はすぐに聞こえなくなった。大きな背中が月明か

りに消える。毛並みが最後まで見えた。体温の残熱が肌に残る。匂いが少し残る。力が、まだ体に残っているような錯覚がある。消えた後も、圧の記憶が体に残る。

透は一人、月明かりの下に残された。

印が疼く。体はまだ熱を持っていた。股間の熱が残っている。指が入った感触が残る。太ももを閉じると腿の印が擦れて鋭く疼く。歩くだけで首筋の傷が動く。熱と痛みが交互に来る。血の乾いた感触が肌に残る。柔らかい内側の傷が、歩くたびに肉を擦って疼く。一步ごとに、所有の証が体に思い出される。

（次も、来るのか。報告する。する、はずだ。親方に……言わなきゃ。仕事だ。罨の見回りだ。でも、体がまだ……印が疼く。この熱

が、消えない。どう報告する。大型がかかった、とだけ言うのか。この印を、どう隠す)

悪態をつきたい。親方に報告する、と言いたい。だが体は正直に反応したままだった。歩くと印が擦れる。首筋の傷に手が触れると、獣人の体温が蘇る。毛並みの感触が、匂いが、力の圧が蘇る。腿の内側の傷が、歩くたびに柔らかい肉を擦って疼く。報告の言葉が、体の熱に阻まれる。仕事の道具で縛られた感触が、まだ手首に残る。

捕らえる側の助手は、今夜、最高の獲物として印を付けられた。

作業着を直す手が、首筋の傷に触れる。熱い。腿の内側も疼く。歩くたびに擦れる。足元が少し不安定だった。印が所有の証として、体に残っている。熱が、まだ消えない。立場が、

書き換えられた感触が残る。捕らえる側の日常が、捕らえられる側の熱に上書きされた。

透は立ち上がった。

（報告する。する、はずだ。親方に、どう言う。大型がかかった、と。でも、この印は……次も来る、と言われて。体が、覚えている）

だが印が疼くたびに、獣人の言葉が蘇る。

「お前も最高の獲物だ」

透は悪態をついた。声は小さかった。体はまだ熱を持っていた。拒否したいのに、体が覚えている。印の痛みが、奇妙に甘い熱を残している。仕事の道具で縛られ、印を付けられた夜が、体に残っている。首筋の熱が、腿の熱が、股間の残熱が、消えない。

「……次に来たら、絶対に撃退してやる」

山の夜は、まだ深かった。

第2話

山の昼下がりがかった。

透はいつものように罨を見回っていた。

親方が近くの獣道を担当している。透は単独で歩いた。作業着の襟を立て、首筋の印を隠す。腿の内側はズボンで覆っている。印はまだ疼く。歯の跡が残っている。動くたびに疼く。昨日の夜の熱が、まだ体に残っている。報告を先送りしたまま、今日の仕事に出た。親方にばれていない。ばれていないだけだ。

一番目の罨に着く。腰の縄に手をかける。罨の張りを確かめるために、縄を解く。縄の感触が掌に伝わる。その瞬間、首筋の印が鋭く疼いた。腿の内側の印から甘い熱が腰まで落ちた。

（またか。仕事の邪魔だ）

体が熱くなる。下半身がわずかに反応する。恥ずかしい。動揺した。親方にばれたらどうする。報告すべきだった。大型がかかった、と。印を付けられた、と。でもどう言う。次も来る、と言われたことを。

縄を強く握る。印がまた疼く。指が震えた。仕事に支障が出る。集中できない。縄を結び直す動作の途中で、首筋の疼きが腰まで落ちた。下半身が硬くなる。ズボンの中で調整しようとするが、触るほど疼く。情けない。縄を結び終えても、疼きが残る。手が縄から離れない。

二番目の罨へ歩く。縄が腰に揺れるたびに首筋が疼く。腿を閉じるたびに内側の印が擦れる。下半身が硬くなったまま歩けない。親方の声が聞こえないかと、周囲を見回す。木々の隙

間から獣道の方角を確かめる。声はしない。安心はできない。

しゃがむ。腿の内側の印がズボンに強く擦れる。疼きが来る。乳首が作業着の布に触れて硬くなる。体が勝手に反応する。汁が少し滲んでいる気がする。動揺した。縄を触ろうとして、指が止まる。疼きが増す。仕事の手が止まる。

（こんなの、仕事にならん。報告しなきゃ。でも……）

立ち上がって次へ歩く。足が重い。印が鋭く疼く。下半身が硬いまま。縄を見るだけで体が反応する。手が出せない。歩行のたびに腿の印が擦れる。乳首が布に当たって疼く。恥ずかしい。情けない。

三番目の罠に着く。しゃがむ。印がズボンに強く擦れる。声が出そうになる。歯を食いしば

る。乳首が硬く、布に当たって疼く。下半身が完全に硬くなっている。汁がズボンに染みる気配がする。動揺した。情けない。罌の張りを確かめる手が、印の疼きで震える。縄を握り直すと、首筋がまた疼く。

（報告する。今すぐ。でもこの体でどう言う。罌師の助手が昼間からこんな反応をしてるなんて。親方に見せられるか。勃起したまま、どう説明する）

風が木々を揺らす。透は足を止めた。

大きな影が、木の陰から現れた。

黒い毛並みの大型の獣人だ。黄色い目。牙。体格は人の倍。体温が近い。熱い。獣の匂いが風に乗る。

「獲物の状態を管理する」

低い声だった。

透は悪態をついた。

「仕事の邪魔をするな。離せ。親方に報告する」

獣人は近づく。大きな手が透の肩に乗る。圧がかかる。逃げられない。体温が作業着越しに広がる。毛並みが頬の近くにある。匂いが濃い。

「報告は後だ。まず管理だ。印の状態を確認める」

手が作業着の襟に入る。熱い。人の手ではない熱さだ。首筋の印を指で撫でる。疼きが増す。熱が広がる。

「ん……っ」

（やめてくれ。仕事中だ。親方がいるかもしれない。ばれたら終わりだ）

「疼いている。いい反応だ」

指が印を軽く押す。痛みと熱が混ざる。体が跳ねる。獣人はすぐに指を離した。

「まだだ」

触れられなくなった。疼きだけが残る。腰がわずかに動く。欲求が少し溜まる。もどかしい。親方の気配を意識して、歯を食いしぼる。印の疼きが、触られなかった分だけ残る。下半身が硬くなったまま、動かない。

次に手が胸へ移動する。作業着のボタンを一粒外す。乳首を指で摘まむ。硬くなっている。転がす。強く、弱く。疼きが来る。

「あっ……」

「敏感だ。管理しやすい」

摘まみ上げるように動かされる。声が漏れそうになる。透は歯を食いしぼる。親方の気配を意識する。声を抑えなければ。もう一方の乳首も摘ままれ、同時に刺激される。腰がわずかに動く。

獣人は指を離した。乳首だけが硬く疼く。空気に触れてさらに反応する。布に当たるたび疼く。もどかしい。恥ずかしい。触れられないまま、疼きが続く。腰がまた動く。

「まだ許さない」

透は息を乱す。

「るっせえ……！ 仕事だ、離せ！」

悪態を吐く。芯は残っている。だが体は熱を持っている。乳首が空気で疼き続ける。下半身

が硬いまま、汁が少し増えている。入口が勝手に脈打つように締め始める。親方の声が聞こえないかと、目を逸らす。

（報告しなきゃ。でもこの状態で親方にどう言う。印を見せろ、とでも？ 勃起を隠せない。仕事に戻れない。このまま罌を見回れるか）

手の下へ移動する。ズボンの紐を緩め、腿の内側に指が入る。印の上を撫でる。疼きが鋭くなる。股間へ落ちる熱。

「ここも疼いている」

「触るな……っ」

指が股間に達する。陰茎を軽く握る。すでに硬くなっている。根元から先へ撫でる。先から透明な液が滲んで、粘って糸を引く。掌全体

で包むように確かめる。先走りが粘って糸を引く。

「反応している。いい獲物だ」

撫でるリズムを変える。強く、弱く。熱が溜まる。透の腰がわずかに動く。恥ずかしい。体が勝手に反応している。先走りが増えて粘る。入口が勝手に脈打つように締め始める。

獣人は手を離した。

「まだだ。管理が先だ」

硬いまま、熱いまま、放置される。先走りが粘ったまま、入口が脈打つように締めつける。欲求がさらに溜まる。指が欲しいのに来ない。もどかしい。イきたい。でも拒否する。親方の影を意識して、声を抑え続ける。喉が詰まる。汁がズボンの中で増えている気がする。入口が

収縮を始める。触れられないまま、体が反応し続ける。

次に指が入り口へ。指先でなぞる。円を描くように。熱を確認するように。入口が勝手に脈打つように締まる。一度、二度。

「ひあっ……！」

「ここも反応している」

指が浅く押し当てられる。入口がわずかに開く。内部の熱を確かめるように。しかしすぐに引く。

「まだ奥は早い。管理が先だ」

透は息を上げる。体が熱い。印が疼く。乳首が硬いまま。股間が疼く。入り口が熱を持っている。なのに触れられない。おあずけだ。入口が脈打つように収縮を繰り返す。腰が浮きそう

になる。恥ずかしい。動揺した。情けない。イ
きたい。触ってほしい。でも拒否する。親方の
気配で、声を抑え続ける。

（こんなの……仕事の邪魔だ。親方に……報
告しなきゃ。でも、この体で……どう説明す
る。勃起したまま罨を見ろ、なんて。情けな
い。管理されたまま、仕事に戻れるか）

獣人が縄を取り上げる。透の手首に軽く巻き
付ける。職の縄だ。仕事の道具が、また自分を
縛る。完全に拘束はしない。管理の印として。

「この縄も管理具だ。お前の仕事道具が、お
前を管理する」

縄の感触が手首に残る。印の疼きと重なる。
体が跳ねる。

乳首を再び摘まむ。転がす。すぐに離す。入
り口をなぞる。浅く触れて離す。股間を握って

離す。寸止めの反復だ。熱だけが積み上がる。
欲求が溜まる。

「んっ……！ ひあっ……！ やめ……あ
っ」

喘ぎが漏れる。意味のある拒否から、短音
へ。親方の影を意識して、声を抑える。喉が詰
まる。

「いい声だ。でもまだ許さない。管理が先」

獣人の体温が近い。黒い毛並みが作業着を通
してざらりと擦れる。体格差で囲まれる。圧が
かかる。逃げ場がない。匂いが濃い。

印を指で押さえ、疼きを増幅させる。同時
に乳首を摘まみ、すぐに離す。入り口に指を浅
く入れてすぐに抜く。股間を撫でて頂点の手前
で止める。

「あ……っ、そこ……っ、やめ……んあっ」

（声を出すな。親方に聞こえる。でも熱い。体が……勝手に。報告できない。この状態で。イきたいのに止められる）

透は悪態を残す。

「仕事の……邪魔だ……！ 次は……撃退してやる……っ」

だが体は正直だった。熱が下腹に溜まる。印の疼きが快感に変わる。寸止めで欲求が深まる。報告が、さらに困難になる。腰が勝手に動く。入口が脈打つように収縮を繰り返す。先走りが粘って糸を引く。

もう一度、乳首を摘まみ、離す。股間を根元から先へ、汁を増やしてから離す。入り口を二度なぞって離す。欲求がさらに溜まる。腰が勝手に動く。恥ずかしい。動揺した。もどかし

い。情けない。イきたい。触ってほしい。でも拒否する。

「まだだ。もっと溜めろ。管理は続く」

さらに、獣人の手が再び動く。印を押さえ、疼きを強める。すぐに離す。乳首を摘まみ、転がし、離す。股間を根元から先へ撫で、汁を増やし、頂点の手前で止める。入り口に指を浅く入れ、壁を擦り、すぐに抜く。同時に刺激して、全部離す。

「んあっ……！ ひあっ……！ だめ……っ」

体が跳ねる。入口が何度も収縮する。腰が浮く。恥ずかしい。動揺した。もどかしい。イきたい。触ってほしい。でも拒否する。親方に聞こえる。報告できない。硬いまま放置される。汁が増えたまま。乳首が空気で疼き続ける。腰

が戻らない。入口が脈打つように収縮を止めない。触れられないまま、欲求だけが溜まる。親方の気配で、歯を食いしばる。喉が詰まる。

「いい。もっと溜めろ。お前の体は俺が管理する」

透は歯を食いしばる。悪態が喉で詰まる。体は正直に反応し続ける。親方の気配を意識して、声を抑え続ける。喉が詰まる。イきたいのに止められる。もどかしい。情けない。入口が脈打つように収縮を繰り返す。腰が浮いたまま、戻らない。先走りが粘って糸を引く。

獣人は縄を緩めた。印を一度撫でて、確認するように。牙が首筋の印の近くに当たるが、噛まない。撫でるだけ。毛並みが肌に触れる。

「逃げても分かる。次も管理する。もっと奥まで管理する前に、お前の状態を整える。欲求

を溜めろ」

大きな背中が森の奥へ消える。体温の残熱が肌に残る。匂いが残る。印が疼く。乳首が硬いまま。股間が熱いまま。入り口が疼く。入口が脈打つように収縮を繰り返す。腰がわずかに動く。もどかしい。イきたいまま、放置された。

透は立ち上がった。作業着を直す。手が震える。印の疼きが、直す動作のたびに走る。ボタンがうまく閉まらない。乳首が布に当たって疼く。下半身が硬いまま、汁がズボンに染みる気がする。ボタンを一つ留めても、次が留まらない。手が止まる。

（報告する。する、はずだ。でも……この体で、どう言う。仕事に支障が出ている。親方にばれる。ばれたらどうする）

縄を腰に戻す。縄の感触だけで、印が疼く。体が覚えている。管理された熱が、消えない。下半身が硬いまま。手が震える。調整しようとするが、触るほど疼く。情けない。縄を結ぶ動作の途中で、また疼きが来る。手が止まる。

縄を腰に戻した後、透は四番目の罫へ向かう。足が重い。印が疼く。下半身が硬いまま。汁がズボンに染みる気がする。縄を見るだけで体が反応する。手が出せない。歩行のたびに腿の印が擦れる。乳首が布に当たって疼く。

親方の方向を見る。声ができる気がした。報告を先送りする。今は無理だ。体が管理されたまま、仕事の日常に戻ろうとして戻れない。情けない。動揺した。親方の前に、この状態で立てるか。立てない。

次の罠に近づく。縄に触れようとして、指が止まる。疼きが来る。仕事に戻れない。さらに次の罠へ行こうとして、足が止まる。下半身が硬いまま。汁がズボンに染みる気がする。入口がまだ脈打つように収縮を繰り返している。腰がわずかに動く。もどかしい。

親方の声が遠くで聞こえる気がした。報告を先送りする。今は無理だ。体が管理されたままでは、親方の前に立てない。仕事の道具が、自分を管理する道具になった。印が疼くたびに、それがわかる。

山の昼は、まだ明るかった。

透は悪態をついた。声は小さかった。

「……次に来たら、今度はちゃんと撃退してやる」

だが体は、すでに管理の余熱を抱えていた。印が疼く。乳首が硬いまま。股間が熱いまま。入口が脈打つように収縮を繰り返す。縄を見るだけで、体が反応する。仕事の道具が、管理具になった。

仕事の日常が、所有の管理に侵食され始めていた。報告は、また先送りされた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 罨師の助手

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026年8月23日

レーティング R18